マルコフ連鎖理論

マルコフ連鎖とは、１９世紀終わりから２０世紀初頭にかけてロシアで非常に影響力を持っていた数学者のアンドレイ・マルコフの理論である。彼はプーシキンの「エフゲニー・オネーギン」という韻文小説から、韻文の子音と母音の並びにヒントを得て、ある事象が起こるとき、それよりもずっと前に起きたことは関係なくて、むしろ直近に起きたこのみが影響を与える。極端に言うと、直近に起きたことだけで判断して決断すると一番いい結果が出るという理論を確立した。これがマルコフ連鎖理論。

マルコフ連鎖は、さまざまな分野に応用されている。天気予報や交通渋滞情報解消に活かされているし、中でも一番注目を浴びたのは、イギリスが第二次世界大戦でこの理論を利用し、勝利したことである。

鳩山元総理は、スタンフォード大学で修士を二つ取って、博士論文も書いている。マルコフ連鎖をベースにした決定理論、つまり「決断」の専門家で、学者としては一流の人である。

日本の政治には腹芸だとか根回しが多すぎる。そうした非合理的なプロセスや要素を排して、新しい合理的な政治を作るために自分は政治家になったのだと言う。

つまり、その政権の最終目標を（目的関数）として定める。その上で、何が可能で何が不可能なのかといった（制約条件）をはっきりさせる。そうすれば、取るべき道は決まる、合理的な政治ができる。鳩山氏は自分の得意分野を政治に応用しようとした。

しかし鳩山氏が考えている（制約条件）は今を生きる人間が作るものである。これは当然、日々刻々を変わる。まさに人間自体が複雑系であるわけだが、鳩山氏が考える複雑系はあくまで関数体の中にある複雑系である。その外側に見えない世界があるという感覚を持っていなかった。

見えない世界とは、ひと昔の言葉では、先験的、超越的な感覚ということである。論理の外にそうした感覚があることをつかんでおくことは意外と重要である。